



第19回生 芥川喜好氏

昭和23年生まれ
昭和42年 本校卒業
早稲田大学美術史学科卒業
読売新聞社に入り、水戸支局をへて文化部美術担当。日曜版の絵画企画「日本の四季」を11年担当。平成4年 日本記者クラブ賞受賞。昨年より「名画再読」を連載中。

地歴研とクラブ活動にもそれほどなり打ちこみましたが、記憶にあるのは読んだ本や見た映画のことばかりです。そのころは日記をつけていて、書き終

東大受験一辺倒の空気のなかで、到底まともとは言いかねる高校生活でしたが、不思議なことにこんな人間でも自分の関心事を話せる相手がクラスに何人もいました。勉強のみならず多方面に人材がいて、なかなか奥の深かった時代でした。一

望通り文化部に配属されて以来、美術の取材に携わってきました。大学は美術史ですから、これも関心事の延長というわけでしょう。退職する編集委員のあとを継いで日曜版一面の絵画企画を任せられたのは、運がよかつたというほかありません。

的に時間との戦いです。連載をもつ身では休みもとれず、毎回の締め切りを追われる現場はまさに修羅場ですが、記事というかたちで自分の考えをまとめ、それを読者に提示し、さまざまな反響を得る過程で苦勞は十分に報われます。

入学したのが東京オリピックの年で、秋風にあって神宮外苑からきこえてくるざわめきを耳にしながら、御苑の草に寝ころんでいた記憶があります。何をしていたかとうと、小説の筋を考え

り、浪人学生の定まらぬ精神状態を心理的な短編に仕立てたり、いま考えても冷や汗の出るような作家生活を送っていました。

この日記がなかなかのケツサクで、当時のクラスの様子や仲間の動きが批判や共感をまじえて詳細に書いてある。人間に對する関心が強かつたのでしよう。今でもクラス

取材した七百人近い画家のなかには昭和の美術史を飾つた人々も多く、「巨匠」たちの最後に間にあつたという思いを深くします。効率最優先の時代にあつて、総じて彼らの生き方は迂遠であり、頑固、非能率、狷介、不屈、ゆるやかな時間感覚

若い方々に何かを申しあげる立場にはありませんが、できれば自分のことと同時に他人のことも考える人間を志していた

性豊かな今のうちに、自他ともに見つめる目を養ってください。大人になつてからでは遅いのです。

いつからそんな道にはなつたのか、気がついた時には小説書きに

採用してもらいました。はしかのようなものでお恥ずかしい話ですが、当時は大正時代の校舎裏側の長い廊下を歩くと靴音が高く天井に響いて森閑とした空気が漂

アホらしい特技がけつこりう役に立ち、クラス会の時は全員の名をそらで呼びあげ出欠をとらせていた

代も常に何かを書いておた。人間のもついわば初源的な力や生命の充足のかたちを日のあたりにし、あくせくせずに生きる極意を学んだ気がしました。

価値観も一変しました。むろん新聞記事は基本的に時間との戦い

た。人間のもついわば初源的な力や生命の充足のかたちを日のあたりにし、あくせくせずに生きる極意を学んだ気がしました。

たものです。この廊下に並ぶ教官室の「敷のかさ」を材料にした

硬式テニス、二年はここに魅せるわけです。

硬式テニス、二年はここに魅せるわけです。

硬式テニス、二年はここに魅せるわけです。

硬式テニス、二年はここに魅せるわけです。

硬式テニス、二年はここに魅せるわけです。

(読売新聞文化部記者)